

『不思議な魚』

「李一、船をできるだけ分ける。」

李一の船はずっと分れて鰯のうしろに廻りました。父親は前から押して行っただけでしたが、沖の方の空いた口から鰯が流れるように逃げ出すのでした。

「早く、早く！」

父親は叫んで早く網を引くように李一に叫んだが、李一は船を自由にできなくて、唯、あわてるばかりでした。切角の大群の鰯はいまはその空いた沖の方へこぼれて行くばかりでした。せっかく

「これまでに何をしてるの？」

父親はそう言ったが、李一にはどうにもならなかったのです。そのうち鰯はなだれを打って沖へずり出しました。

その時、沖の方から何か真白なものの群れが押し寄せて来たのです。白い肌をした美しい手足の魚です。そのため、なだれを打った鰯はまたぎらぎら沸き立って、戻りはじめたのです。

「早く、早く。」

李一はその時すっかり網を鰯の群れに巻いてしまったのです。それと同時に白い肌をした魚の群れは沖の方へかえって行きました。李一は見たことのある魚だと思ったが、よく分らなかったのです。

父親は、「ああいう魚は始めて見た、一たい何という魚だろう、あれが押して来なければ切角の鰯も捕れなかったのだ。」

そう言っ大漁を喜んで、岸の方へさして船を漕ぐのでした。これで今年の冬がくらせると父親は安堵あんどをしたのだった。

李一は鰯を網から外すとき、ふと、二足の白い肌をした魚が網の目にかかっているのを眺めた。白い魚の方でも李一を見詰めたが、李一は涙ぐんで見返すのであった。いつか町から買って来て放した魚であることを知りました。李一はこの魚の群れが、今日の漁を助けてくれたことを思って、二足を海の中へ放してやったのでした。